World Wildlife Fund

世界の自然を守る ③

——WWFの活動——

藤原英司

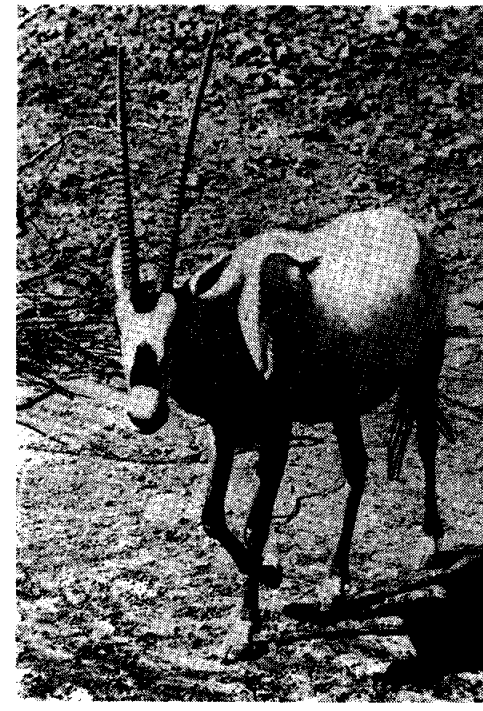
オリックス作戦

ローマのファルネーゼ宮の壁画に、馬のような角のある獣が、少女にじゃれついている画がある。イタリアの画家ドメニキーノが描いた〝ユニコーンと娘〟という絵であるが、このユニコーン（一角獣）という獣は古来幻の獣といわれ、ローマ時代から詩や文学には登場するが、だれもその姿を見たものがないといわれていた。しかし、いろいろな人がこの獣の由来を探っていくうちに、これはどうやらオリックスを真横から見た旅行者が、二本ある角が重なって見えるのを誤って一本と見たためだろうということになった。オリックスの角はほぼ直線にのびているため、真横から見ると重なって一本に見える。

オリックスにはいくつか種類があり、中にはミカヅキヅノオリックス（またはシロオリックス、*Oryx tao*）のようにサーベル型の角をもっているものもあるが、ベイサオリックス（*Oryx beisa*）、ゲムズボック（*Oryx gazella*）、アラビアオリックス（*Oryx leucoryx*）などは、いずれも直線に近い角をもっている。この直線型の角は真横から見ると、たしかに一本に見えることがある。わたしも東アフリカの北部でベイサオリックスを見たとき、おやっと思った覚えがある。距離が遠く、真横からであったため、正に一角獣に見えたのである。まして足もとにかげろうでも立っていれば、幻の獣としての雰囲気は申しぶんなくそろうことになる。

オリックスはだいたい荒地をすみかにしているものが多いが、アラビアオリックスはイラク、シリア、アラビアなどの砂漠地帯にすみ、抜群の耐久力をもつといわれる。炎熱の砂漠にすみながら、体高一メートルの体で、毎日わずか二オンスていどの水分をとるだけですむというから驚歎に価する。しかもスチュワートの記録によれば、オリックスは十八時間の間ほとんど並み足で歩きつづけて、五十八マイルを進んだという。このような驚くべき性能をもつ動物は、古来、砂漠の遊牧民族の羨望の的となり、人びとの心になんとかしてそのタフな体力にあやかりたいという欲望をかきたててやまなかった。そして多くのベドウィンがラクダに乗ってオリックス狩りにくりだした。かれらは涼しいうちだけ追って、暑くなると休むという原始的な追跡をくりかえしてオリックスを追ったが、それも二週間が限度で、それ以上追跡をつづけることはできなかった。ラクダが水を飲まないで過ごせる限度が、二週間だったからである。

だが、そのような悪条件にうち勝ってオリックスを倒した者は、オリックスのもつすばらしい活力と勇気を身につけることができると信じられていた。おまけに倒したオリックスは、ほとんど棄てるところがないといっていいくらい利用価値があった。肉は食べるとじつにうまく、売りにだせば、むろん高く売れて多額の現金収入をもたらした。というのはオリックスの肉は、勇気と力と耐久力のエッセンスと考えられていたからである。皮はむろんかれらにとって貴重品であったし、脂肪はさまざまの病気に非常によくきくとされた。また血と脂肪とまぜたものは、蛇に咬まれたときの傷にきくとされた。一九三二年にトマスが書き残した記録によると、ベドウィン達はオリックスの胃液を好み、また胃の中につまっている物は自分達のラクダに与えたという。



アラビアオリックス

動物が絶滅への道を歩んだ背景には、大きくわけて二つのものが考えられる。ひとつは、恐竜のように自ら自然環境に適合できなくなって自滅の道をたどったものと、人間による迫害の結果、衰退の道を歩んだものである。今日のたいていの動物は、多かれ少なかれ、後者の道を歩みつづけているが、今日、絶滅の危機に瀕しているものは、ほとんどが人間のむこうみずな殺害によるものが多い。アラビアオリックスが激滅した背景にも、やはり同じような現象がみられる。

ベドウィン達の殺戮は、時間のかかるマラソン競走のようなきわめて効率の悪いものではあったが、長い年月にわたって継続的におこなわれた結果、オリックスの生息領域はしだいにせばめられていった。かつては、メソポタミヤの東からシナイ半島にいたるアラビア半島のほとんどの地域に、アラビアオリックスがすんでいた。ところが十九世紀の末ごろには、わずかにアラビア半島の二箇所に残存するだけになってしまった。つまり、半島の北部に広がる広大なネフド砂漠と、半島南部のルブアルハリ砂漠の南マスカット・オーマンのあたりである。一九三〇年ごろまでは、半島北部のヨルダンで少数のオリックスが見られたが、これが姿を消し、二〇年後の一九五〇年代初期には、ネフド砂漠からも消息を断った。こうしてアラビアオリックスはユニコーンのように、文字どおり幻の獣として、アラビア半島の南部に追いつめられていったのである。

アラビアの地図を見ると、大部分が砂漠であることがわかる。この砂漠地帯は高温乾燥地で、日中の温度は四八度C以上、夜でも二六度C以上といわれ、人間にとって、生活に適した場所とはいいえない。ところが石油の発見が、大量の人間を砂漠地帯へ踏みこませることになった。おまけに銃器と自動車がもちこまれ、いままでの状態では考えることもできなかった大量のオリックスが、つぎつぎと殺害されはじめたのである。そしてベドウィン達はいうにおよばず、石油会社の職員や兵隊、一般市民までが、こぞって車と銃器によるオリックス狩りに狂奔しはじめた。

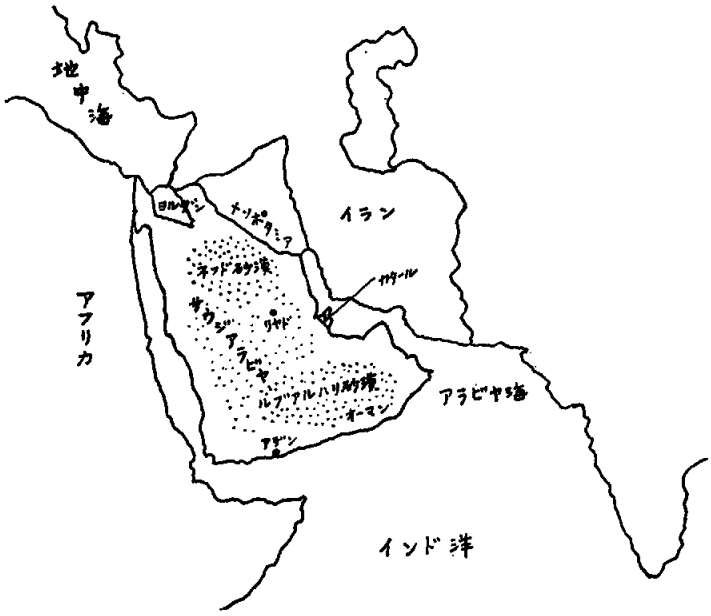
かれらはよく整備された車に、燃料や水、食料、弾薬、高性能の銃などを積みこみ、主として十二月から一月にかけての涼しい冬季に、オリックスを追った。一回に数週間という長い期間を追いつづけ、一度に四十八頭を殺したという記録が残っている。さらに別の折りには一回に十三頭が殺された。これは一見たいした数でないように思われるが、かつてベドウィン達がラクダで二週間かかって追跡し、やっと一頭しとめられるかどうかだったという時代にくらべると、まさに雲泥の差がある。

しかも、石油成金たちは金に糸目をつけぬ大規模な狩猟隊を組織し、一度に三百台の車を連ねて砂漠へくりだすことさえあった。じっさいに狩りをする人間はそのうち数台の車に乗り、あとはことごとくキャンプ用具や召使い用のもので、その大がかりな狩りは、さながら動くホテルを従えた狩猟であった。しかも、単発のライフル銃にあきたりなくなったかれらは、連発銃を装備し、目につく動くものをなんでも撃ちまくった。従って十九世紀から二十世紀にかけて、アラビア半島から姿を消していった動物は、オリックスだけではなかった。アラビアダチョウ（Arabian Ostrich）は絶滅してしまったし、チーターもほぼ全滅した。また、ノガン（Bustard）はいちじるしく数を減じ、かつては数多く見られたガゼルも、絶滅寸前の状態にまで追いこまれたのである。

銃で射殺することにあきると、かれらは車で徹底的にオリックスを追いまわし、相手が動けなくなって倒れたところで、召使いにナイフでのどを切らせるようなことまでやった。アラビア王室の狩りも、じつにものすごかった。すでに物故したサウド王の狩りに同行したフィルビイは、王が一人で一日に百頭以上のガゼルを殺したという話を伝えている。また、一九五五年一月から四月にかけておこなわれた王室の親善狩猟のときには、四八二台の車がサウジアラビア北部をかけめぐり、およそ動くものはなんでも殺し

たといわれる。

その後、さらに石油成金になったアラビア人たちは、飛行機を使って狩りをやりだした。こうしてオリックスはしだいに人跡まれな奥地へ逃げのび、ついに半島南部のオーマンのあたりに、わずかに見られるだけになった。オリックスがこの地域に限って長く命脈を保ったのは、アラビア王室が保護をおこなったためである。王室は法令によってその地のオリックスを保護したが、これはほとんど効を奏しなかったといってよい。なにぶん辺ぴな土地であるためと、密猟のとりしまりが十分におこなわれなかったため、地方のベドウィンが機動力を用いて神出鬼没するのを制御できなかったからである。そして一九五五年の末には、オリックスの残存総数は、わずか百頭か二百頭に減少してしまった。



アラビアオリックスの生息地

オリックスの急激な減少は、心ある人々をなげかせ、ついにルブアルハリ砂漠へ調査隊が出発した。しかしこのとき、発見されたのはわずか二頭のオリックスに過ぎなかった。しかもそのうちの一頭は発見後まもなく銃弾の傷がもとで死亡した。残った一頭は雌だったが、調査隊はそれを捕えてロンドン動物園へ連れ帰った。

アラビアの石油開発はその後も急速にすすみ、油田を求める人びとは、いままでは思いもかけなかった奥地にまではいりこむようになった。そしてその人びとには必ず護衛の兵隊がついた。兵隊たちはアラブ人だったが、これが奥地でオリックスを見るとつぎつぎ射殺した。石油会社としては、その連中の行為を規制することができなかった。

こうなると、アラビアオリックスが地球上から姿を消すのは、もう時間の問題になってきた。一九六〇年、タルボットは「危機に瀕した動物概観」(“A Look at Threatened Species”)の中で、アラビアオリックスについて、つぎのように記している。

〃絶滅の危機にさらされているこの動物を生きながらえさせる道はただひとつ、何頭かを安全な土地へ移すことである…。しかも、これは早急に実行されなくてはならない〃

この提案は、ただちに国際自然保護連合の生物保全委員会(IUCN's Survival Service Commission)の注意をひいた。委員会は活動を開始し、イギリスの動物保護協会(FPS)と共同してオリックスの救助にのりだすことになった。FPSはこれを〃オリックス作戦〃(Oryx Operation)と名づけ、スイスの世界野生生物基金(WWF)に持ちこんだ。作戦の骨子は、さし迫った危機に対処するため、かなり思いきったものだった。ふつうなら危機に瀕した動植物の生態調査がおこなわれて、そのうえでしかるべき保護策が講じられるのであるが、今度はそんな悠長なことを言っている暇はなかった。野心的な原地人が一回でも大規模な密猟にのりだせば、アラビアオリックスは今日にでも、この地上から抹殺されてしまうかもしれない。従って一刻も早く現地へ出向いて、生き残りのオリックスを何頭でもいいから捕え、それを安全な土地に移して繁殖をはかり、自然状態での絶滅に備えなくてはならない。つまり増殖の核ともいうべきものを、直ちに確保する必要があった。

作戦の基本態勢がきまると、つぎには誰をいつ、どこへ派遣し、オリックスを何頭捕え、どこで飼育するかといったやっかいな問題を解決しなくてはならなかった。国籍を異にする国で、ある動物を捕え、その元の生息地に似た環境を見つけて、その種の維持に適した特殊な飼育をおこなうについては、どうしても世界の各地から、よりすぐった人を集め、国籍にとらわれないで場所の選定をすすめる必要がある。WWFが誇る超国家的な組織はこのようなケースに対して、威力を発揮することになった。WWF本部は

〃オリックス作戦〃について、アラビア王室、アメリカ支部、イギリス支部、ケニヤ政府などとの間に密接な連絡をとり、着実に作戦展開の具体案をまとめていった。

その結果、オリックスの捕獲には、東アフリカ、ケニヤのイシオロで主任狩猟監視官をつとめるグリムウッド少佐が指揮をとって、アラビアへのりこむことになった。捕獲はアラビア半島南部にあるアデン保護区（Aden Protectarate）でおこなわれることになり、捕獲するオリックスの目標数は八頭。捕獲後の飼育地には、アメリカのアリゾナ州がえらばれた。アリゾナは気候風土が、アラビアオリックスの生息地にきわめて似ていたからである。幸いアリゾナのフェニックス・メイタッグ動物園（Phoenix Maytag Zoo）に優秀な飼育管理のベテランがいて、捕獲したオリックスはこの動物園へ運びこまれることになった。動物園側ではさっそく受けいれ準備がすすめられた。

いっぽう、WWFでは計画ナンバー十七号のもとに、〃オリックス作戦〃を実行に移す資金調達を開始した。またグリムウッド少佐のところでは、アラビアの砂漠でオリックスを捕獲するための人選や、機械の準備がおこなわれた。

フェニックス動物園では、アラビアオリックスを迎えるため、特別に一区画を区切り、その周囲を金網で囲うとともに緩衝地帯を設け、一般の動物園入場者の雑沓から完全に隔離するようにした。そして囲いの中に生えている有害なサボテン、雑草、数のたぐいは、ことごとく一掃した。アリゾナには、丈の高いサグアロと呼ばれるサボテン（Saguaro Cactus）が生えているが、そのサボテンのトゲまで、ひとつひとつ摘みとるという神経の使いようだった。また囲いを区切っていくつも門をつくり、それぞれの囲いを門で連結して、中へいれたオリックスを自由に思いどおりの囲いへ導けるようにした。囲いの中には日よけをつくったが、そこにはちゃんとした建物をつけるか、または小型の砂漠生育樹木をたくさん配置して、木陰ができるようにした。えらばれた土地は、乾いた流砂に周囲をかこまれた岩の多い荒れはてた丘の斜面で、両側に余分の広い地域が残されていた。将来、囲いの拡張が必要になったとき、その部分へひろげることができるようにするためだった。

WWFではオリックスの捕獲に用する派遣費用を約二、〇〇〇ポンド（約二百万円）と見積り、その額の支出を決定し、イギリス支部が支払いに応じた。そして一九六二年ついにグリムウッド少佐が七人のメンバーを引きつれて、アラビアの砂漠へのりこんだ。オリックスの発見には、飛行機が用いられたが、探索は難行した。いくら飛びまわり、走りまわっても、オリックスの姿はどこにもなかったのである。目を射る灼熱の太陽と、はてしない大海のような砂漠が、どこまでもひろがっているばかりだった。少佐の一行は六千マイルを調査したが、結果はむなしかった。

しかし、ついに四頭のオリックスを発見した。探険隊は勇みたったが、その四頭を捕獲するのが大変だった。グリムウッド少佐は、このときの追跡で肋骨を二本折るという重傷を負った。しかし、とにかく四頭はことごとく捕えた。だが、そのうちの一頭は、捕獲後、まもなく死亡した。解剖したところ、そのオリックスの足から銃弾が発見された。残る三頭は、二頭が雄で、一頭が雌だった。この三頭は直ちにアラビアから送りだされたが、最初にまず、ケニヤのイシオロへ送られた。そこで獣医たちの厳密な検査を受けたのち、はじめてアメリカへ送られた。

フェニックス動物園では、用意してあった囲いへオリックスを収容するとともに、特定の職員以外は囲いへの出入を禁じた。また、他の動物を囲いへ近づけることも厳禁した。なお水や食餌については、細心の注意が払われた。オリックスの餌は、砂漠に生育する貧弱な植物で、その栄養価は、バミューダ草（Bermuda Grass）を刈りとって一週間放置したものと同じぐらいだった。しかし、飼育係がもっとも苦心したのは、水の供給だった。オリックスは一般の獣のように、水そのものを飲むことはしない。摂取する水分はすべて、食べる植物の葉にふくまれるものとか、ときたま夜露や、まれに雨水でおぎなうだけだったからである。さらに動物園当局がもっとも心配したのは、収容したオリックス達が、囲いに激突して負傷するのではないかということだった。しかし幸いそのようなことはなく、三頭はしごく穏かに生活をはじめた。そこへロンドン動物園で飼われていた雌一頭が到着し、群れは四頭になった。これは〃世界の繁殖群〃（World Breeding Herd）として、中核的存在を形成することになった。

この群れの形成は、絶滅に瀕したオリックスの数をふやすばかりでなく、増えた群を維持管理するための資料集めにも、重要な役割りをはたすことになった。つまりいまでは、オリックスの習性はほとんど知られていなかったのが、身近で観察することができるようになって、いろいろなことがだんだんわかりはじめたことである。食性や妊娠期間、生息環境、行動特性、ライフ・サイクルなどが、しだいに明らかになってきた。

その後、クェートのサルタンからフェニックス動物園へオリックスが一頭寄贈され、"World Herd" は総計五頭になった。

しかし五頭という数は、なんといっても少ない。いったん疫病でも起これば、いっぺんに全滅しないとも限らない。そこでWWFでは一九六三年四月に、第二回目の探索隊を送りだした。しかしこのときは、ついに一頭も見つからなかった。そのかわり、WWFの度重なる努力はしだいに関係者の間に、ことの重要性を認識させる効果を生みだした。マスカットのサルタンやオーマンの陸軍、ベドウィン民兵のなどの間から協力しようという動きが高まり、やがて石油会社までが協力に参加するようになった。それにWWFの努力によって、サウド王が自分の牧養地から、雄二頭と雌二頭の合計四頭をフェニックス動物園へ贈ってくれることになった。二頭の雌のうち一頭は妊娠していた。四頭はサウジアラビアから、まずイタリーへ積み出され、そこで六十日の検疫期間をへたのち、一九六三年七月に、飛行機でニューヨークへ運ばれた。そしてニュー・ジャージーにある政府検疫所でくわしい検査を受けたあと、やっとアリゾナのフェニックス動物園へ輸送された。

フェニックス動物園のアラビアオリックス

一九六三年九月は、フェニックス動物園にとって記念すべき月となった。その月、いままで飼われていたオリックス五頭の群れに子どもが生まれたのである。子どもは体高十六インチで、長い耳と、つぶらな褐色の目をもち、ふわふわした短い毛のついた尾をつけていた。そのあと、慶事はなおもつづいた。サウド王からとどいたオリックスの雌が、あいついで子どもを生んだのである。こうしてフェニックス動物園のアラビアオリックスは、たちまち十二頭になった。

一九六五年までに、WWFではアラビアオリックスのため、二度の支出を裁決した。二、九三〇ポンド（約二九三万円）と八四ポンド（約八万四千円）であり、これらはアメリカ支部によって支払われた。そして群れも少しずつ増え、一九六五年末には、合計十七頭（雄十一頭、雌六頭）に増加した。

当時、アラビアオリックスは、他に二箇所飼っているところがあった。いずれもアラビア半島で、ひとつは半島中部のリヤドであり、もうひとつは半島西南部のカタールにあるスラミーだった。しかし、リヤドの群れは雄八頭にすぎず、カタールには雄九頭と雌六頭で、本場のアラビアで飼われている数としては、きわめて淋しいものだった。そのほか野生のオリックスが、何頭現存するかということはわかっていない。おそらくオーマンの奥地の縦二五〇マイル、横一〇〇マイルほどのところに細々と生きのびているものと思われるが、その数は十数頭ともいわれ、わずか二、三頭ともいわれる。またこの地域の外で、ときに一頭とか、数頭の群れが目撃されたという報告がはいることがある。しかし、広いアラビア全土のオリックスをくまなく集めてみたところで、その数はたかがしれている。野生のオリックスは、いまや名実ともに幻の獣と化しつつあるわけである。

そしてその幻の獣を、まがりなりにも守ろうとして実力を発揮したのが、いまから五十年前には幻の構想といわれた今日のWWFである。むろん〝オリックス作戦〟は、WWFが独力で実施したものではない。あらゆる関係機関や、多くの個人の善意が結集されて、はじめて実現したものである。しかし、その多くの国の多くの力をひとつにまとめたものは、やはりWWFの国境を越えた組織の力であったといいっていいだろう。

（写真および資料はWWF本部の提供による）

（野生生物保護基金日本委員会・常任理事）